

鳥居龍蔵の見た台湾



関連行事

- ギャラリートーク 1月28日(土) 13:30~14:30 企画展示室
講師 野林 厚志氏(国立民族学博物館准教授/企画展監修協力者)
観覧料が必要です
- 展示解説 2月5日(日)、2月26日(日) 14:00~14:30 企画展示室
観覧料必要
- 記念講演会 2月19日(日) 13:30~15:00 文化の森イベントホール
講師 宮岡 真央子氏(福岡大学准教授)
「学術探検家・森丑之助と鳥居龍蔵」
参加無料
- 記念シンポジウム 「鳥居龍蔵の足跡を考える —台湾・中国・朝鮮半島—」
3月4日(日) 13:00~17:00 文化の森イベントホール
講師 山路 勝彦氏(関西学院大学名誉教授)
武田 和哉氏(奈良市埋蔵文化財調査センター主任)
吉井 秀夫氏(京都大学准教授)
参加無料

監修協力者 野林 厚志氏(国立民族学博物館准教授)

協力者(50音順、敬称略)

関西大学博物館、国立公文書館、国立台湾博物館、国立民族学博物館、財団法人千里文化財団、四国中央市立暁雨館、順益台湾原住民博物館、新宮市立佐藤春夫記念館、東京大学総合研究博物館、遠野市立博物館

天羽利夫、小坂史子、鳥居 喬

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館企画展

鳥居龍蔵の見た台湾

発行 2012年1月28日

執筆 石尾和仁、下田順一

編集・発行 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

〒770-8070 徳島市八万町向寺山 文化の森総合公園内
TEL 088-668-2544 FAX 088-668-7197
<http://www.torii-museum.tokushima-ec.ed.jp>

印刷・製本 株式会社 教育出版センター

〒771-0138 徳島市川内町平石流通団地27
電話 088-665-6060

開催にあたって

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館は、平成22年11月3日に開館して以来、1年あまりが経過し、多くの方々に親しんでいただいております。今回の企画展「鳥居龍蔵の見た台湾」は、開館1周年記念事業の一つとして開催するものです。

鳥居龍蔵は、1896（明治29）年から台湾での人類学調査に着手し、1911年までの間に、合計5回の調査を行いました。台湾のほぼ全域を調査し、すべての原住民族の言語・風俗習慣を記録したほか、考古学的な面でも大きな足跡を残しました。これらの調査にカメラを用い、原住民族の生活を記録した多くの写真を残しています。この企画展では、鳥居龍蔵が採集した台湾の民族・考古資料や撮影した写真などを紹介しています。鳥居龍蔵による台湾調査の一端にふれていただければ幸いです。

企画展の開催にあたり、国立民族学博物館、財団法人千里文化財団をはじめ、多くの方々にご協力を賜り、また、国立台湾博物館には格別のご配慮をいただきました。厚くお礼申し上げます。

平成24年1月 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館長 高島 芳弘



とりい りゅうぞう
鳥居 龍蔵 (1870-1953)

鳥居龍蔵は、1870（明治3）年に現在の徳島市東船場町で生まれた人類学・民族学・考古学の研究者です。20歳で上京、東京帝国大学人類学教室の坪井正五郎に師事しました。そして、日本国内はもとより、台湾、中国西南部、中国東北部、朝鮮半島、シベリア、サハリン、千島列島など、東アジア各地のさまざまな民族の言語、習慣、生活文化を調査したり、遺跡の発掘調査をしました。その調査成果を膨大な数の著作にまとめています。なお、1921（大正10）年には「満蒙の有史以前」で文学博士の学位を授与されました。

※地名および民族名は鳥居龍蔵の記述に基づいています

I. 鳥居龍蔵の台湾調査

鳥居龍蔵は、日清戦争（1894～1895）の結果、日本の領土となった台湾で、1896（明治29）年から1911年にかけて5回の調査を実施した。台北にある円山貝塚や台湾南東に浮かぶ紅頭嶼（現在の蘭嶼）など、台湾のほぼ全域を巡り、すべての原住民族を調査、記録した。これらの調査で、日本人の人類学者として初めてカメラを用い、自ら撮影した。

①第1回調査（1896年8月～12月）

基隆に上陸後、台北で台湾総督府の樺山資紀総督に面会し、円山貝塚の調査を行なった。その後、花蓮に向かい、東海岸一帯でアミ族などの民族調査を行なった。帰途には、沖縄に立ち寄り、風俗習慣の調査をした。

②第2回調査（1897年10月～1898年1月）

東京地学協会から派遣され、台湾総督府の乃木希典総督の紹介状を持って調査を実施した。徳島市出身の中島藤太郎（p. 7参照）をともなって、台湾南東に浮かぶ紅頭嶼でヤミ族の調査をした。

③第3回調査（1898年10月～12月）

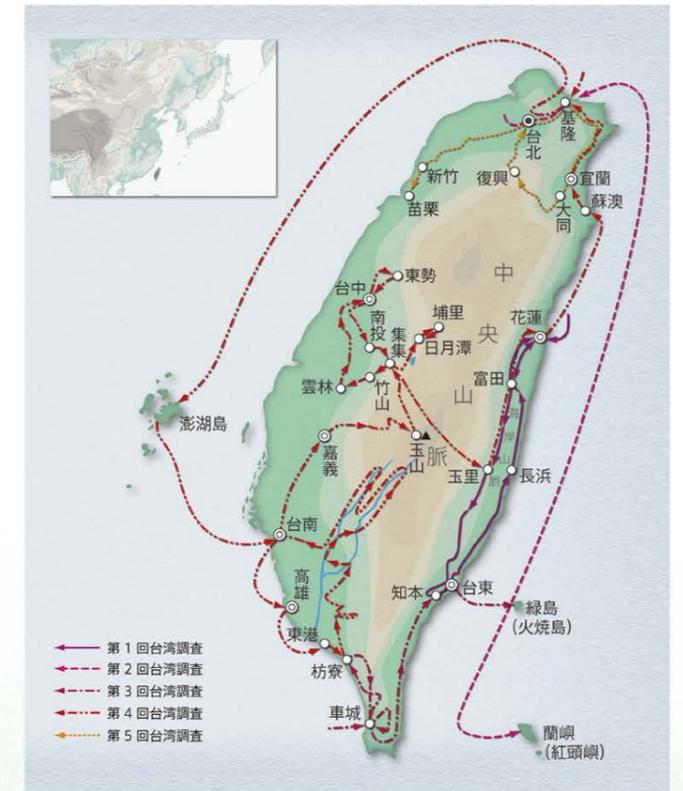
車城、恒春、牡丹社から知本溪、台東、火烧島にかけて、パイワン族など台湾南部の諸民族の調査を実施した。

④第4回調査（1900年1月～10月）

森丑之助（p. 9参照）を助手にともない、基隆から澎湖諸島へ、そして台湾本島に戻り台湾南部から北上し、新高山（現在の玉山）登頂を果たした。その後東海岸にくだり調査を実施した。

⑤第5回調査（1910年12月～1911年2月）

1910年12月に台湾入りし、宜蘭からボンボン溪を経て台北に至り、そこから西海岸の新竹や苗栗を訪れている。その後、紅頭嶼や火烧島に向かうと書かれた坪井正五郎宛の手紙が残されているが、行ったかどうかは今のところ確かめられていない。





鳥居龍藏執筆の台湾関係報告書・論文掲載誌



台湾中央山脈（濁水溪付近）の手書き地図



鳥居龍藏・森丑之助作成の台湾石器時代遺物分布図（国立台湾博物館所蔵）

●鳥居龍藏が収集した民族資料



パイワン族の楯（国立民族学博物館所蔵）



ヤミ族の割舟（国立民族学博物館所蔵）



ヤミ族の首飾り（国立民族学博物館所蔵）

●鳥居龍蔵による原住民族の分類

鳥居龍蔵は、台湾調査を通して、言語、伝承、風俗習慣から原住民族を、次の9部族に分類した。

I. タイヤル族

台湾北部から中部にかけての山岳地帯に暮らし、^{げいめん}黥面（顔に彫る入れ墨）の風習を持つ。鳥居は、東西2集団に分類し、埔里地方の霧社付近から北方の蘇澳山にかけての弧状のラインで区切られるとした。

II. ブヌン族（高山蕃）

埔里から卑南山地にかけての高所地帯に暮らす部族。

III. ツォウ族（新高族）

新高山周辺の八通関や阿里山などの山岳地帯に暮らし、スンガウ、カナップ、阿里の3集団があると分類した。

IV. サウ族

台湾中央部の水社湖周辺に暮らす部族。4つの集落しかなく、相互の連絡にはクスノキの幹を彫りくぼめた丸木船を用いていると報告した。

V. ツァリセン族

阿里山南方の山岳地帯に暮らし、風俗習慣はパイワン族やピウマ族などと類似していると報告した。

VI. パイワン族

南部海岸地帯に暮らしているが、パリジャリジャウ、チャクボクブン、パカルカル、スポンの4集団に分類した。

VII. ピウマ族

卑南付近に暮らし、ツァリセン族と同様、風俗習慣はパイワン族やピウマ族などと類似していると報告した。

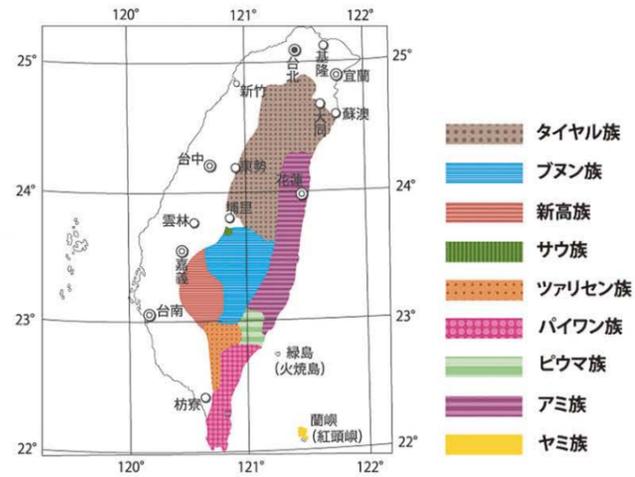
VIII. アミ族（阿眉族）

東海岸部の平地に暮らす。平地の原住民族は漢人化が進んでいたが、アミ族は唯一漢人化されていなかった。

IX. ヤミ族

紅頭嶼に暮らし、バタン海峡を渡ってフィリピン方面からやってきたという伝承をもつ部族である。言語や風俗習慣はフィリピン北部の原住民に類似していると報告した。

現在は、他民族のグループとされていたものや漢民族との融合が進んでいた民族も独自性が高いとして、台湾の行政院原住民族委員会によって14民族が原住民族に認定されている。

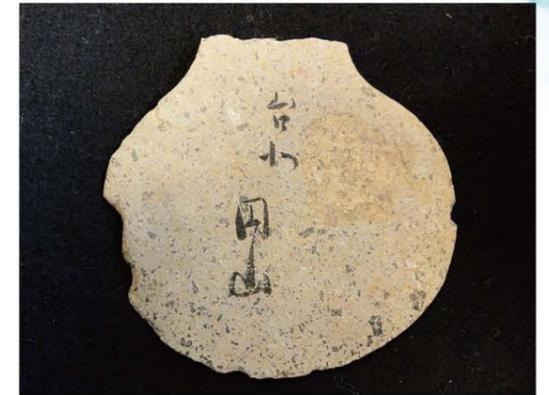


原住民族分布図（鳥居龍蔵作成図を改変）

もとやま ひこいち
本山 彦一 (1853-1932)

大阪毎日新聞社の第5代目の社長に就いた本山彦一は、研究者と幅広い交流をした。自らも円山貝塚で発掘調査をするなど、台湾研究にも足跡を残している。

特に、鳥居龍蔵とは深い関わりがあり、近畿地方の石器時代遺跡の調査や新潟県佐渡島での調査をともにこなったほか、鳥居邸に書庫を建造し寄贈している。



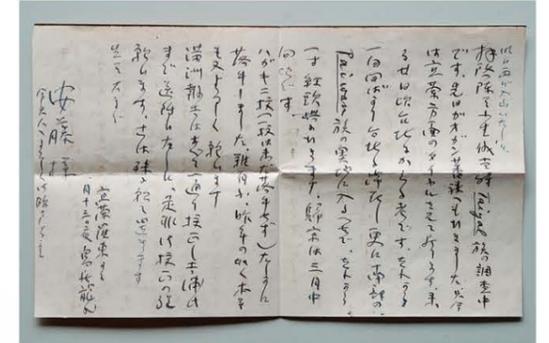
磨製薄刃石斧
(関西大学博物館所蔵本山コレクション)

あんどう せいがく
安藤 正楽 (1866-1953)

現在の愛媛県四国中央市土居町出身。明治法律学校（現在の明治大学）を卒業し、県会議員を務める。

1908（明治41）年に県会議員を辞職した後、東京大学人類学教室で鳥居龍蔵らから人類学・考古学を学んだ。この時期、台湾調査に臨んだ鳥居龍蔵から多くの書簡が送られている。

帰郷後は、地元の「平坂山石器時代遺跡」を調査するなど、愛媛県の考古学研究の端緒をひらいた。



安藤正楽宛て鳥居龍蔵書簡（個人蔵）

なかしま とうたろう
中島 藤太郎 (1867-1897)

徳島市出身の中島藤太郎は、第2回台湾調査の時に、助手公募の新聞広告に応じて同行したが、調査中に火傷を負って亡くなった。

現在、徳島市寺町の円徳寺に墓がある。墓碑銘は坪井正五郎の撰文である。



中島藤太郎墓碑

II. 人類学調査の諸相

● 植民地時代の人類学調査

日本にとって、新たな領土となった植民地の統治を円滑にすすめるためには、その地域の多様な民族構成や生活文化を知ることが必要であった。そのため、実地調査が盛んに行われた。台湾総督府から調査依頼を受けた東京帝国大学は鳥居龍蔵を派遣した。

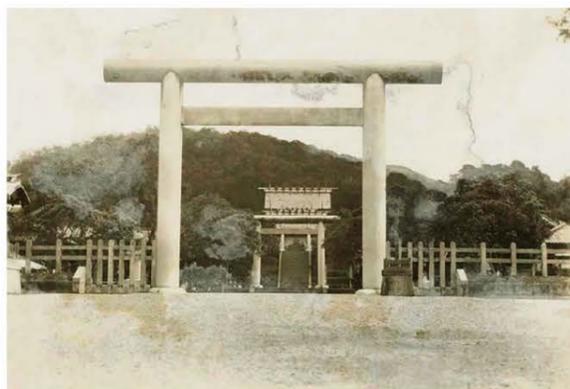
鳥居龍蔵のほか、台湾総督府の職員となった伊能嘉矩（1867-1925）や森丑之助（1877-1926）、さらに田代安定（1856-1928）ら多くの研究者が台湾調査を行なった。

● 台湾総督府

日清戦争の結果、清から台湾および澎湖諸島を割譲させた日本が台北に設置した植民地統治のための機関。総督は海軍・陸軍の大將または中將が務めた。初代総督は樺山資紀、以後、桂太郎、乃木希典、児玉源太郎、佐久間左馬太らが総督を務めた。



戦前の絵葉書に見る台湾総督府



台湾神社



総督府刊行の『台湾蕃人事情』



臨時台湾旧慣調査会の刊行物

● 蕃語集の編纂

台湾総督府は、原住民族と直接向き合う官吏や警察官に現地語を習得させ、原住民族と直接意思疎通できるようになることを目的に1897（明治30）年に「蕃語編纂方式」を示した。

この方式に基づいて初めて刊行されたのが『黙蕃語集』（1906年に台中庁警部の飯島幹太郎が編纂）である。その後、森丑之助によって『ばいわん蕃語集』（1909）、『阿眉蕃語集』（1909）、『ぶぬん蕃語集』（1910）が編纂された。



『黙蕃語集』

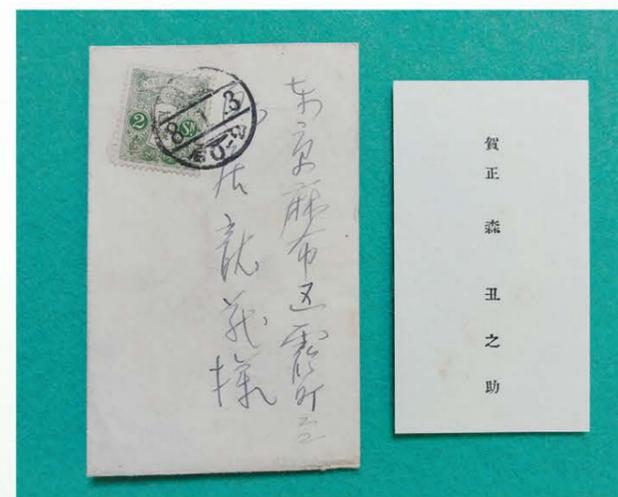
● 森 丑之助（1877-1926）

京都市出身の森丑之助は通訳として台湾に移住していたが、第4回調査の時に鳥居とともに新高山に登頂し、この時の行程を「生蕃行脚」にまとめている。また、後に『台湾蕃族図譜』『台湾蕃族志』などを著し、原住民族に最も精通した日本人となった。

詩人の佐藤春夫をはじめ、日本からの来訪者の案内にも努めた。



台北での集合写真（佐藤春夫記念館提供）
（前列右から2番目が森丑之助）



鳥居龍蔵宛ての森丑之助年賀状



「森氏」の注記のある石斧
（関西大学博物館所蔵 本山コレクション）

いのう かのり
伊能 嘉矩 (1867-1925)

現在の岩手県遠野市の生まれ。岩手県尋常師範学校（現在の岩手大学）で学び、のちに上京して新聞社・出版社勤務を経て、1893（明治26）年に東京帝国大学人類学教室で坪井正五郎に学んだ。

台湾総督府設置後すぐに職員となり、台湾全土の人類学調査に取りかかった。その成果を『東京人類学会雑誌』に寄稿した。

1906年に帰郷してからは、遠野の民俗調査を行なった。1925（大正14）年にマラリアの再発で亡くなると、柳田国男の尽力で、遺稿集『台湾文化志』（1928）が刊行された。



伊能嘉矩（遠野市立博物館提供）

たしろ やすさだ
田代 安定 (1856-1928)

南方植物の研究者。現在の鹿児島市加治屋町の生まれ。藩校造士館に学んだ後に上京、内務省博物局に入り、日本初の動植物目録の作成に取り組んだ。

1895（明治28）年に台湾総督府殖産局に赴任し、台湾南部の恒春熱帯植物殖育場を創設するとともに、原住民族の調査も行なった。その成果を『東京人類学会雑誌』に寄稿するとともに、収集した資料を東京大学に寄贈した。晩年は鹿児島高等農林学校（現在の鹿児島大学）の教員を務めた。



田代安定
（『沖縄結繩考』（養徳社、1945）より）



伊能嘉矩が寄稿した『東京人類学会雑誌』



田代安定が寄稿した『東京人類学会雑誌』と東京人類学会への寄贈資料リスト

●東京大学総合研究博物館所蔵資料

東京大学総合研究博物館には、各種学術標本等が多数保存されている。この中には、東京帝国大学から派遣されて調査を行なった鳥居龍蔵、松村瞭や、台湾総督府に勤務していた佐山融吉、後に台北帝国大学教授になる宮原敦らが採集した台湾各地の考古資料がある。



土器蓋、土器口縁、土器把手、算盤玉
（円山貝塚出土）



片刃石斧（円山貝塚出土）



土器蓋、土製腕輪、磨製石器、打製石器
（台湾烏山頭にて、松村瞭採集）



石錘（台湾水底寮にて、宮原敦採集）



凹石、叩き石、打製石斧（大崙坂にて採集）



耳飾り残欠（佐山融吉採集）

Ⅲ. 台湾原住民族の記録

鳥居龍蔵は、台湾調査を通して、原住民族を9部族に分類した。その後、森丑之助らの研究によって、より詳細な分類が行なわれた。そのような人類学者たちは、原住民族について詳細な調査を行ない膨大な民族資料を収集したり、写真を撮影した。それらを通して、19世紀末から20世紀初頭の原住民族の暮らしを知ることができる。



ボカリ社（パイワン族）の人々
（東京大学総合研究博物館所蔵）



粟を搗くパイワン族の女性
（東京大学総合研究博物館所蔵）



ツォウ族の家と住人
（東京大学総合研究博物館所蔵）



ブヌン族の石鋤
（国立民族学博物館所蔵）



ヤミ族の筐
（国立民族学博物館所蔵）

コラム

●第5回台湾調査について

これまで鳥居龍蔵の台湾調査は、1937（昭和12）年に『ミネルヴァ』誌上で、鳥居自身が「台湾調査は五、六回ある」と記していたにもかかわらず、自伝である『ある老学徒の手記』（1953）の記述にしたがって1896～1900年までになされた4回の調査に限定して論じられることが多かった。

しかし、第5回目の調査が行なわれたことが確かめられるので、この点について整理しておこう。まず、台湾の山岳家・楊南郡氏は、当時の台湾での新聞報道で、1910年鳥居が台湾総督府の依頼で台湾を訪問していたことを確かめている。また、鳥居龍蔵自身の日記の一部が解読され、1910年12月に台湾に渡ったことが記されていることも確認された。

その他、この第5回調査の頃に親交のあった安藤正楽に宛てた手紙も残されていたり（p. 7 写真）、1911（明治44）年2月発行の『東京人類学会雑誌』299号には、宜蘭からガオガン蕃地を調査したと記した鳥居の書簡が掲載されていることから、1910年末から1911年春にかけて、5回目の台湾調査を実施したことが確認できるのである。

なお、東京大学総合研究博物館には、まさしく鳥居が台湾に滞在していた時期にあたる明治44年1月17日に宜蘭で採集された打製石斧が所蔵されている。



「明治44年1月17日 蘇澳スタヤン」の注記のある石斧
（東京大学総合研究博物館所蔵）

●カメラとガラス乾板

鳥居龍蔵は、台湾の調査で初めてカメラを用い、たくさんの貴重な写真を残した。当時の写真は現在のようなデジタル式やフィルムではなく、ガラス板に薬剤を塗った「ガラス乾板」を使用した。鳥居が使用した乾板は、1枚が縦12cm、横16.7cm、厚さ2mm、重さ約80gという規格がほとんどである。調査の時は数百枚撮影しているのに、乾板だけでもかなりの重さとなり、運搬・移動には大変な苦勞をともなったであろうと思われる。

スケッチが主流であった当時の人類学調査にカメラを導入したことは、調査の迅速性・客観性を高める上で大きな効果があった。その後、急速に多くの研究者によってカメラの利用が広まった。



ガラス乾板

●台湾原住民族の現状

台湾原住民族とは、台湾の人口の多数派である漢族系住民より古くから台湾に居住してきたオーストロネシア系先住民の総称である。歴代の中国王朝からは生蕃、日本統治時代には高砂族とよばれた。中華民国施政下では当初山胞とよばれたが、1980年代の半ばからはじまった、自決権も含め、彼らの社会や歴史、文化を尊重することをもとめた社会運動（原住民運動）を契機に、もともとの台湾の住民という意味の原住民族という名称が用いられるようになった。アワや根菜類の焼畑栽培、狩猟活動を慣習的な生業とし、精霊や人間の霊魂を信仰するアニミズム、武勇と規律を尊ぶ気風が見られ、かつては首狩りも慣行されていた。現在は都市部への移住が多く、衣食住はもとよりキリスト教の信仰や中国語（普通語）の普及等、漢族系住民と同様な生活様式が浸透している。

（野林厚志／国立民族学博物館准教授）



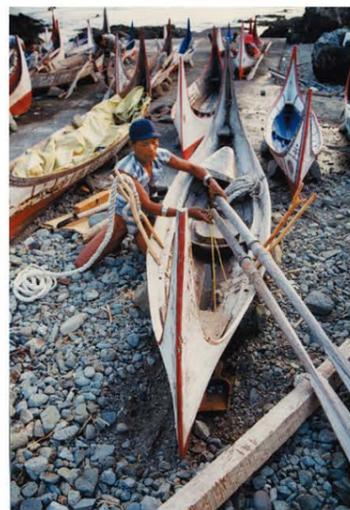
パイワン族の5年祭



原住民族の子ども達の歌や踊りの舞台



パイワン族のトンボ玉の工房



出漁の準備をするヤミ（タオ）族

●鳥居龍蔵の台湾調査とその現代的意義

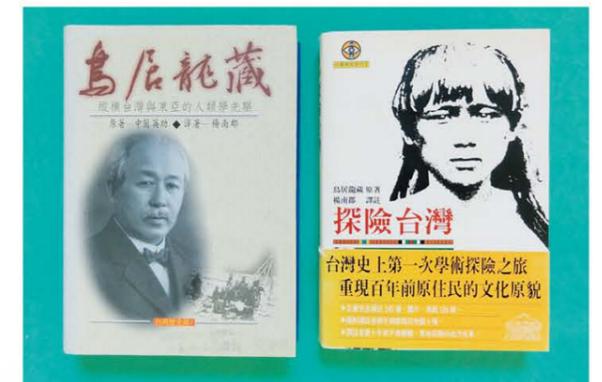
鳥居龍蔵は、台湾の原住民族調査を通して中国西南部の雲南省や貴州省に関心を広げていくことになった。そのような意味から、鳥居にとって、台湾調査はその後の研究方法を確立していくうえで画期になったものと評価できよう。

ところで、日本人類学の草創期に活躍した鳥居龍蔵が、今も注目されているのは、台湾調査で撮影されたものを中心に大量のガラス乾板が東京大学で再発見されたことがきっかけである。そして、1991年に「乾板に刻まれた世界」展が東京大学総合研究資料館で開催された。その後、1993年には国立民族学博物館や徳島県立博物館で「鳥居龍蔵の見たアジア」展が開催され、さらに各地で展覧会が行なわれた。

一方、台湾でも鳥居龍蔵に対する評価が高まり、1994年には順益原住民博物館（台北市）で鳥居龍蔵の写真展「跨越世紀的映像—鳥居龍蔵眼中的台湾原住民—」が開催された。その後も、楊南郡氏の『台湾百年前の足跡』『探検台湾—鳥居龍蔵的台湾人類学之旅—』が出版され、鳥居龍蔵に対する関心が高まっている。



順益台湾原住民博物館での展覧会のようす



台湾で刊行された鳥居龍蔵関連書籍

〔主要参考文献〕

猪谷 千香 2001 「前人未踏のフィールドワーク鳥居龍蔵」『日本人の足跡—世紀を超えた「絆」を求めて—』産経新聞ニュースサービス

国立民族学博物館 1993 『民族学の先覚者 鳥居龍蔵の見たアジア』国立民族学博物館

新宮市立佐藤春夫記念館 2003 『佐藤春夫宛森丑之助書簡』新宮市立佐藤春夫記念館

東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編 1991 『乾板に刻まれた世界—鳥居龍蔵の見たアジア—』東京大学総合研究資料館

徳島県立博物館 1993 『徳島の生んだ先覚者 鳥居龍蔵の見たアジア』徳島県立博物館

鳥居 龍蔵 1976 『鳥居龍蔵全集 第五巻、第十一巻、第十二巻』朝日新聞社

西田 素康 2004 「新出の鳥居龍蔵関係資料」『史窓』34号 徳島地方史研究会

野林 厚志 2004 「鳥居龍蔵の台湾・西南中国調査」『史窓』34号 徳島地方史研究会

野林 厚志 2009 「歴史をこえた博物館資源の往還—鳥居龍蔵の台湾・西南中国調査とその資料—」北京日本学研究中心編『21世紀東北並日本研究論文集』学苑出版社

宮岡 真央子 1997 「野人の文化人類学—森丑之助の生涯と研究—」『南方文化』24号 天理南方文化研究会

柳本 通彦 2005 『明治の冒険科学者たち 新天地・台湾にかけた夢』新潮社

山路 勝彦 2004 『台湾の植民地統治：〈無主の野蛮人〉という言説の展開』日本図書センター

山路 勝彦 2006 『近代日本の海外学術調査』山川出版社

楊南郡（笠原政治・宮岡真央子・宮崎聖子訳）2005 『幻の人類学者森丑之助 台湾原住民の研究に捧げた生涯』風響社